

翻訳 セバスティアノー・ティンパナーロ

『ラハマン・メソッドの創成』（2）

伊藤博明

第3章 ラハマンのテキスト批判の活動の第一局面

テキスト批判の方法が18世紀に成し遂げた偉大な進歩ののち、われわれは、19世紀の最初の四半世紀において、古い立場への回帰を眼の当たりにする。ヴォルフに続く世代の、2人の最も偉大なテキスト批判者であるゴットフリート・ヘルマンとイマヌエル・ベッカーは、互いにきわめて異なっていたが、新約聖書の偉大なテキスト批判家たち、そしてエルネスティとヴォルフによって予示されていた体系的な「校合」(recensio)の要求に、二人とも無縁であった。ヘルマンはギリシアの言語と様式の驚くべき精通者であり、韻律の研究に決定的に重要な貢献をなした。しかし、彼にとって、写本の伝統はいかなる関心も呼び起こさなかった。彼による諸校訂版は写本ではなく、先行する版に基づいており、彼がギリシアの詩人たちのテキストに貢献した改善は推測の、あるいはともかく、内的な基準にだけ基づいた選択の成果であった。

たしかに彼は、きわめて多くの、それまで乗り越えることのできなかったテキスト上の困難を決定的な仕方ですべて解決するのに成功した。というのは、彼にとって、著作家の言語と様式を徹底して認識することが常に、テキストを再構築するための第一の、そして本質的な条件であり続けたからである。一方、古典古代のテキストの文書上の基礎づけに対する彼の完全な無関心は、たんにヴォルフとベックの新文献学への無理解という側面だけではなく、また18世紀のテキスト批判に比較しても後退を表わしている¹。

一方、ベッカーは諸写本の疲れを知らぬ探索者であった。われわれは彼に、イソクラテスのウルビーノ写本 (Vaticano, Urb. gr.111)、デモステネスのパリ写本 (Paris. gr. 1934)、テオグニスのパリ写本 (Paris. Suppl. Gr.288)、アリストパネスのラヴェンナ写本、プラトンの多くの写本のように、第一級のテキストの原典の再発見と評価を負っている。しかしながら、彼はヴォルフのお気に入りの弟子だったにもかかわらず、けっして体系的な校合について考えることはなかった。ヴィラモヴィッツが正しく述べているように、ベッカーは、アッティカ方言の散文についてきわめて精通していたことは疑いないが、「写

¹ Cf. Jahn 1849 :20. ゴッペ (Sauppe 1841:5 = Sauppe 1896: 82.) には次のように述べられている「テキスト批判の技巧を果たそうと望む者は正当にも、まず第一に、写本を検討しなければならず、そして写本の特徴をできるだけ正確に調査し、探究しなければならない。私は、あなた [ゴットフリート・ヘルマン] がこのことをきわめてしばしば警告していたことを思い起こす」。ゴッペがここで、好意を得ようとして、自分の師 [ヘルマン] が実際にはけっして述べなかったことを彼に帰しているのかどうかは、また、ヘルマンがこの教訓を自らの弟子たちに対して実際に述べたが、自らはそれを適合させることがなかったのかどうかは、疑問のままに留まる。理論と適用との同様な対照は、すでにエルネスティとヴォルフ自身について指摘した。第2章註39, 47を参照。この章への「付記」も参照。

本の選択と読解においては、実際には、自らの言葉と様式への感覚にのみ頼っていた」²。

テキスト批判の方法論が19世紀初頭におこなったこの後退は³、ラハマンの最初の仕事もたらした偉大な独創性の印象を——たとえそこでは、18世紀の文献学では周知のものだった諸原理を(ときおり、洗練さと注意深さに欠いて)再確認するだけであったが——部分的に説明している。

古典のテキスト(ドイツ語のテキストはすぐのちに言及する)の批判の領域で、ラハマンはその活動を、プロペルティウスの版(ライプツィヒ、1816年)から始め、それに、カトゥルスとティブルスの版と、プロペルティウスの「試作版」(editio minor)が続いた(すべて1892年)。また重要なのは、ゴットフリート・ヘルマンが刊行したソポクレスの『アイアス』(Ajax)への論評⁴とティブルスについての二つの論評である⁵。

ラハマンは彼の思想の最初の局面において、論争的に、かつパラドックス的に、もっとも緊急な課題は、厳密に原文とおりの(diplomatiche)版を、すなわち、われわれの手元に達しうる最も古い形態の写本の伝統を、「意味と文法の規範をできるだけ考察に入れずに」⁶再生産する版を提供することであると断言している。それゆえ、推測的批判だけではなく、また解釈自体も先送りされる。その時代までは、批判版は概して、同時に解釈を伴っていた——たしかにハイネのような人々は解釈を、またヘルマンのような人々はテキスト批判を優先させてはいたが。そして、文献学のロマン派的理論家はすべて、フリードリヒ・シュレーゲルからアスト、シュライアーマッヒャー、ベックまで、「批評的・解釈的サイクル」を主張していた、あるいは主張することになった。他方、ラハマンは純粋に批判的校訂版を提供した。プロペルティウスへの序文において(1816: iv)、ラハマンは読者を、解釈に関係することはJ・G・フシュケが刊行を計画している注釈へと促しており、またルクレティウスへの序文においては(1850a: 15)、シュタインハルトとライザッカーの将来の解釈作業に委ねることになるだろう⁷。批判的編集資料(apparato critico)は、プロペルティウスの初版においては、まだ「考慮されていた」が、カトゥルスとティブルス、およびプロペルティウスの第二版においては「乏しい」ものとなった。

写本の伝統に関して、ラハマンはとりわけ、改竄された写本と改竄されていない写本との区別について主張している。人文主義者の改竄を含む写本は除外しなければならない。彼らの特殊な読みを引きずられるならば災いである。この「イタリアの学識者たち」

² Wilamowitz 1894: 42.

³ 他の例を挙げることができるだろう。たとえば、文献学の新しい傾向の推進者の一人であるフリードリヒ・アストは、プラトンの彼の版において、1531年のアルドゥス版を底本として採用し(Ast 1819: iii)、できうるかぎり、それから離れないように努めた。イングランドでのエリムスレーの部分的な例外については原著 p.57 を見よ。

⁴ Lachmann 1818 = Lachmann 1876: 2.1-17.

⁵ Lachmann 1826 = Lachmann 1876: 2.102-45; Lachmann 1836 = Lachmann 1876: 2.145-60.

⁶ Lachmann 1876: 2.2. Cf. Lachmann 1876: 2.145-46. 「ローマのエレジー詩人たちの私の版において、私はあらゆる後代の気紛れをできるだけ排除しながら、真正な伝達を完全に提示するという慎ましい目的をもっていた」。

⁷ 彼はシュタインハルトにその名を挙げずに仄めかしている(hominis cuiusdam egregii)。Cf. G. Muller 1958: 253n.

(docti Italiani)⁸への不信の中で、彼のプロペルティウスへの序文⁹はとりわけ激しい調子を帯びている、「優雅さ」に対する「真実」の論争において、ラハマンはとりわけスカリゲルに近いと自ら感じているが、オランダの文献学者の大部分について厳しい表現をとっている¹⁰。またラハマンの言語においては、スカリゲルの言語におけるのと同じように、文書上の真実の純粹な要求だけではなく、また批判的＝美的動機が感じられる。すなわち、オリジナルの読みは、判断することができる者にとっては、改竄された読みよりも美しいのである。生硬な古典は古典主義の虚飾よりも望ましいはずである。

年齢的にラハマンに近い言語学者たちの間で、彼はゴットフリート・ヘルマンよりもベッカーに共感を抱いており、そのことは当然である¹¹。奇妙なのは、ヴォルフの名が挙げられていないことである。実際、テキストを古文書の堅固な基礎の上に置くことを要求したのは、ベッカーよりも、むしろヴォルフだったからである（原著71ページ以下）。そして、ホメロス問題を研究し、それに類似する「ニーベルンゲン問題」を創造したラハマンは、他の誰にもまして、ヴォルフ『ホメロス序説』（*Prolegomena ad Homerum*）を知っていた¹²。

しかし、ひとたび改竄された写本が取り除かれたときに、改竄されていない写本の間で、いかにしてテキストは構成されるのであろうか。ラハマンは、このような場合には、原初の読みは、「熟練した精神の推論と熱意によって」¹³のみ見いだされる、と答える。それゆえ彼は、まだいかなる機械的な基準（すでにベンゲルによって表された種類の基準）も頼みとしていない。また彼は頼みとすることもできない。というのは、プロペルティウス、カトゥルス、ティブルス校訂版において、彼はまだ、諸写本の系譜を跡づけていないからである。たしかに彼は、きわめて少ないが、ある写本が別のある写本と「ほとんど一致している」とか、ある諸写本が「一つの源泉に由来する」¹⁴ことを示唆している。しかし、それらの示唆は散発的なものであり、異読の機械的な選択のための基盤を与えることはできないであろう。

この観点から見ると、ラハマンはいまだに、ハイネとシュヴァイクホイザーによる、不完全ではあるとはいえ、系譜的な試みの後塵を拝していた。彼が真正な写本と改

8 Lachmann 1861: xii. ここで、また続いて、「改竄された写本」と「イタリア人の写本」は、ラハマンにとって同義語である。

9 とりわけ以下を見よ。Lachmann 1816: xvii-xviii.

10 Lachmann 1816: xvii. そこでスカリゲルを別にして、唯一称讃されているのはリヴィネウス、すなわち、ヤン・リーフェンス（1546-99）である。Lachmann 1829: iii.

11 Lachmann 1829: iv: 「たしかに、私がこの学芸において、イマヌエル・ベッカーよりも進んだと思われるのであれば、私自身は喜ぶであろうし、彼が抗議しないことを望む」。ヘルマンについては、上述(n.4)の書評を参照。

12 表現上のある類似は、おそらく偶然的なものではないであろう。たとえばヴォルフでは（F.A. Wolf 1985 [1795] 44）、「正しい校合は……包帯を取り去って傷を晒すことである」。ラハマンでは（Lachmann 1829: iii）、「疫病が襲い……包帯を取り去って、深い傷跡を残す」。

13 Lachmann 1816: xvi. 「というのは、異なる読みを示している良好な諸写本の場合も、別の場合も同様に、正確で原初の読みは、熟練した精神の推論と熱意によってのみ回復させられることができる」。ここで「別の場合も」という表現は、あらゆる写本が改竄された読みを示しており、編者が推測によってそれを回復しなければならない場合に言及していると、私には思われる。

14 Lachmann 1816: xii; 1829: vi.

竄された写本の間におこなった区別は、それらの価値に関わるもので、それらの始原に関わるものではない。すなわち、ポリツィアーノが実行し始め、彼に追従した他の古典文献学者たちのように、ラハマンは改竄された写本を除外したが、それは現存している写本のコピーだからではなく、単純に信頼できないものだからである¹⁵。そして部分的には、遠隔の図書館に所蔵されている写本の照合を求める困難さのゆえに¹⁶、部分的には、彼には無益な学識の寄せ集めと思われたものすべてに対する横柄な不快感のゆえに¹⁷、彼は常にきわめて少数の、しかもしばしば、むしろ恣意的に選ばれた写本に、自らの校訂版を基づかせることになった¹⁸。カトッルスのために、彼は2つの写本だけに基づかせた。この場合には、異読の間の選択が内的な基準にのみ基づいていたことはまったく明らかである。というのは、機械的な基準は少なくとも3つの証言を利用することが必要だからである。しかしながら、当該のカトッルスの校訂版において、彼は失われた原型のページを再構成することができたと信じ、ページ数を欄外に記したが、それはモリーッツ・ハウプト¹⁹が試みた擁護にもかかわらず、失敗した試みだった。次に見るように、ルクレティウスについてのラハマンによる類似した試みは十分に成功した。

プロペルティウス、カトッルス、ティブルススの校訂版と同じ時期に、ラハマンは中世のドイツ詩の分野においてもまた、広大な批判的=テクスト的活動を展開していた。その時代に、ロマン主義の刺激によって起こったドイツ研究の興隆（ヴァッケンローダー、ティーク、ウーラント、アルニム、ブレンターノ、グリム兄弟の名前を想起すまで

15 パスカアーリ (Pasquali 1952a [1934]: 5, 25) が正しく指摘しているように、「派生的写本の除外」(eliminatio codicum descriptorum) はラハマンによってけっして実行されはしなかった。しかし彼の言葉からは、この作業はラハマンに後続する世代によって初めて企てたように思われるだろう。われわれがすでに見たように(原著 pp. 16-19)、それはすでにポリツィアーノとヴェットーリによって実行されており、続いてボツヴァンとシュヴァイクホイザーによって実行されることになったことをわれわれは見てもあろう。そして、次に、ラハマンの存命中に、ゾッベがきわめて厳密な方法によって実行したのである(原著 pp. 69s.)。別の訂正。パスカアーリ (Pasquali 1952a [1934]: 4n1) によれば、ラハマンは「中世にほとんど、あるいはまったく読まれなかったテクスト」の場合のみ、校合者たち(recentiores)を信頼しようとはしなかった。しかし、実際には、ハウプトが引いている証言では(Belger 1879: 121)、校合者たち一般が参照されている。「彼の考えでは、まったく権威を欠いている諸写本を、[すなわち、古い写本と]と同じ精密さによって、グループやクラスに分類することはほとんど有益ではない」。

16 この困難さはパスカアーリ (Pasquali 1952a [1934]: 4-5) によって強調されている。たしかに、ヘインシウスやベッカーのような研究者はきわめて多くの写本を見ることに成功した。しかし、彼らはヨーロッパ中を旅する機会をもっていた。一方、ラハマンは1815年の対ナポレオン戦争の間を除いては、ドイツから出ることはなかった。しかしながら、根本的な理由は2番目のものである。次註を参照。

17 たとえば、プロペルティウスへの序文(Lachmann 1816: viii)を見よ。「この無価値なグループからの、あまりの多くの写本が校合されてきたので、われわれはすでに、それらの読みにうんざりして、吐き気を催すほどである」。あるいはティブルス(Lachmann 1829: 1829)を見よ。「ともかくも、時間を無駄に使いたい者はだれでも、膨大な誤謬と学者たちの無数の解釈を積み重ねれば容易に可能だろう」。

18 プロペルティウスについては、彼は正しくも、ナポリ写本(現在はヴォルヘンヴェッテル Gud. Lat. 224)を利用したが、それがグローニンゲン写本(Groningen: Bibl. Universitatis 159)よりも劣っていると考えたことで誤っている。ティブルスについては、彼が使用した写本の中で(クイアキアヌ断片を無視すれば)、真に重要な唯一の写本はエボラケンシス写本で、N・ヘインシウスによって校合された(Berlin, Diez. B. Sant. 55d, pp. 15-24)。カトッルスについては、彼の選択はあまり成功しなかった(cf. Pasquali 1952a [1934]: 5n2)。

19 Haupt 1936: 1-2 = Haupt 1875-76: 1.1-2. Cf. Ellis 1878: xxxv-xxxvi; Wilamowitz 1982 (1921): 130, 141.

もなく) に対して、彼は古典文献学から学んだ、厳密に文献学的方法をもたらしただ。そして、こうして彼は、元来は大衆に媚びる反動的な文学者たちによって推進された「中世への回帰」であったものから、研究の学問的方向性を誕生させるにあたって多大な貢献をなした²⁰。

われわれが先に、古典文献学に関することを検討した1816年から1829年の期間に、ラハマンは『ニーベルンゲン』(1826年)、ハートマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』(1827年)、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの詩集(1827年)の校訂版を刊行し、その傍らで、ドイツ文献学についての数多くの論考と論評を著した。同じ領域においては、ヴォルフラム・フォン・エシェンバッハ(1833年)、ハートマン・フォン・アウエの『グレゴリウス』(1838年)、ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタイン(1841)の各校訂版と、さまざまな論考と再刊が続くことになるだろう²¹。

ドイツ語ドイツ文学研究[Germanisitica]に無知である私に、ラハマンのこのような活動分野について判断する権限がないのは明白である。しかしながら、「校合」の純粹で単純な技法に関することについては、おそらく私もなにがしかを語ることができるだろう。私には、これらの仕事において根本的には、ラテン語詩の序文における同じラハマンが認識されるように思われる²²。しかしながら、またそこには、写本の素材を探索するさいの最大の配慮が(校合された諸写本の純粹な選択から帰結されるように)、また諸写本の間の親族関係を探究するさいの、少なくとも、同一の作品の様々な改訂を識別するさいの最大の配慮が見てとれる。

私が思うには、この方法上の小さな差異は、部分的には諸写本へのより大きな接近の可能性によって(ほとんどすべての写本はドイツあるいはオーストリアに存在している)、部分的にはラハマンの論争上の標的が異なっているという事実によって説明される。すなわち、古典的テキストについて、彼はとりわけ、17世紀および18世紀の諸版において積み重ねられた、大量の無価値な異読を除外する必要性を感じていた——そしてこのことが、彼を過剰な単純化へと押しやる結果となった。他方、中世のテキストについて彼は、校訂は唯一の写本(原則として、最も古い写本)に基づかなければならないという、反対の予断²³を論駁しなければならなかった。そしてこのことが、彼を他の諸写本

20 ラハマンとドイツのロマン主義との関係についてはレオ(Leo 1893: 6-7, 17-18 = Leo 1960: 2.418-19, 430-31)を見よ。私はスパルナイ(Sparnaay 1948)の研究(D・イルマーのご教示による)を参考できなかった。ルッツ＝ヘンゼル(Lutz-Hensel 1975)については以下(原著 p.144n11)を参照。

21 より詳細な文献目録についてはヘルツ(Hertz 1851: 100-119)とその付録(xxiv-xxxii)を見よ。私は、『イーヴェイン』のラハマン版を参観できなかった。

22 例えば、ヴォルフラム・フォン・エシェンバッハへの彼の序文(Lachmann 1879 [1833])において、彼は典型的なせっかちさで、諸写本の系譜を探索することを放棄している(「しかし、なぜ最も小さな細部に探究を進めなければならないのだろうか」)。そして、諸写本の一つのクラスに、「たとえこれが全体としての真実を減じることになろうとも」常に従うことを断言している。

23 中世学者たちの間で、この予断は長きにわたって存続していた。イタリアでは、19世紀の後半にエルネスト・モナーチが擁護しており、ライナとバルビが攻撃していた(Cf. Pasquali 1942: 222 = Pasquali 1968: 2.157-58)。われわれの世紀[20世紀]では、ベディエがそれを再興させようと企てた(Bédier 1928)。これへの反対としてはバスクアーリ(Pasquali 1932a: 130-31; Pasquali 1942: 232-33 [=Pasquali 1968: 2.163-64]、デーン(Dain 1975 (1949): 142)がある。さらには以下の「付録C」(n.3)とアヴァッ

を校合することへと、校訂版のための文書上の基盤を拡張することへと導いた。そしてここにわれわれは、テキストをその始原の形態において再構築するために、少なくとも4つの、あるいは5つの写本が必要であると断言する²⁴、ドイツ語ドイツ文学研究者としてのラハマンを見いだす。もし最近の一写本が、言語的な、そして正字法的な現代化を含んでいるとしても、より古い写本よりも真正な読みを保持することができること²⁵、真に除外すべきものは、現存している諸写本のコピーだけであること²⁶、これらの言明は、古典文献学の領域に移し変えられるならば、ほとんど反ラハマン的な響きがある²⁷。

ラハマンは、古典的テキストの批判に先だって、ドイツ語テキストの批判に、異読の選択における機械的な基準の適用しようと試みた。残念ながら、彼がF・H・フォン・ハーゲンによる『ニーベルンゲン』の第2版の書評において、この目的のために定式化した諸規則は、まったくの謎であり、おそらくはいくつかの思い違いに加えて、真正の誤謬を含んでいる。この点については「付録A」(原著 pp.111s.)を見られたい。ラハマン自身は、『ニーベルンゲン』の彼の校訂においてその規則をまったく用いずに終えた。しかし、「ラハマン・メソッド」の創成を探究するためには、この最初の未完成の企ても重要性を有している。

第3章の補遺

ゴットフリート・ヘルマンは、その生涯の最後に年月に、推測的批判の唯一の基盤として、流布版を用いる代わりに諸写本を参照する必要性を感じていたのであろうか。彼はラハマンによる、随分と前の『アイアス』の書評における彼に対する批判(第3章、原著46ページ註4を参照)の正当性を、少なくとも部分的に認めていたのだろうか。答えは「諾」のように思われる。アントニオ・ラ・ペンナは私に、彼の論考「ディオニュシオスとメソメドスの讃歌について」(Hermann 1842: 1 = Hermann 1827-77: 8.343.)の冒頭における言明について注意を向けさせてくれた。「誤った伝達を訂正するときには、書かれた文書の信頼性を第一に吟味しなければならないことは疑うことができない。通

レ(Avalle 1972:28-29)を見よ(彼は部分的に、コンティーニ[Contini 1942: 129-32]の方法論的考察を参照している)。上に引いた研究者たちが見てとり、バルビもすでに理解していたように、ペディエの基準が正当化されうる唯一の場合は、あらゆる写本(あるいは諸写本のグループ)が独立した改訂を表しており、ある意味で自立的な作品であるときであり、そしてこれは民衆の伝承のテキストにおいて(あるいは著者によって「改訂された」文学的テキストにおいて)しばしば起こることである。もし、実際の不可能性という理由によって、すべての異なる改訂版を別々に刊行するということを放棄しなければならないならば、現実存在したいかなる改訂版と合致していない、混成されたテキストを編纂するよりも、ただ一つの改訂版を選ぶ方が実際のところ、好ましいであろう。

²⁴ Lachmann 1876: 1.89; cf.161, 285-86 (= Lachmann 1817).

²⁵ Lachmann 1876: 1.163 (= Lachmann 1820b: x).

²⁶ Lachmann 1876: 1.89.「容易に無視することができる写本は、現存している模範のコピーだけである」。

²⁷ 中世のテキストの校訂家としてのラハマンについては、スタックマン(Stackmann 1964, special.p.55 e n.45)を参照。私には喜ばしいことに、スタックマンは、ドイツ語ドイツ文学研究者としての彼の特別の経験によって、私がこの研究の初版においておぼろげと述べたことを実質的に確証している(もちろん、新しい考察によって豊かにされている)。

常、このことは、われわれがテキストのただ一つの範例だけを所有しているときには容易である。だが、互いに異なるいくつかのテキストが存在しているときにはより困難になる。われわれが、テキストの真の形態が伝達されておらず、結局は推測によって跡づけなければならぬのではないかと疑うとき、すべての中でも最も困難になる」。

われわれが先に引用した（そして、ヘルマンのこの論考のほんの1年前の、1841年の日付をもつ）ゾッペの証言は、いくらかの歪曲はあるといえ、少なくとも部分的には、真実に対応している。だがしかし、ラハマンだけではなく、また（本書第5章で見えるように）、オレリ、マドヴィク、ツンプト、リチェルが、すでに多年にわたって、テキストの文書基盤を探究するために必要なもの、「文書への信頼」(*fides scripturae*)について、繰り返し断言していた。ヘルマンはこれらの声に完全に耳を塞ぐことはできなかった。

他方で、彼はあまりにも自らの文献学的実践（実際に素晴らしい結果をもたらした）に拘束されており、そしておそらくは、すべてを「革新する」ためにはあまりに年老いていた。彼はこの原理の宣言に（同じ論考の中でさえ、諸写本の読みへのいくつかの散発的な暗示を除いては）、新しい諸方法の適用を対応させていないばかりか、またその宣言自体が明確さと首尾一貫性の模範ではないのである。

第一に、ヘルマンはいまだに、「校合」(*recensio*)と「校訂」(*emendatio*)の区別よりもむしろ、「写本に基づく校訂」(*emendatio ope codicum*)と「才知に基づく校訂」(*emendatio ope ingenii*)の区別に拘束されているように思われる。次に、真正のテキストの再構成における3つの段階の「困難さ」を挙げるさいに、異なる諸観点の間である混乱を生み出している。唯一の写本を利用しうるときの「容易さ」は、「都合の良さ」の意味で理解されているように思われる。この場合には、ヘルマンにとっては重い責務として、そしてときには無益な責務として現われ続けた（必ずしも誤っているわけではないことは認めるべきだろうが）、多くの写本の校合と系統図の作成という労苦に満ちた探究に入り込む必要はない。しかし、もし唯一の写本に基づくべきことが、文献学者にとって必ずしも不運なことではないとしても（この点についてはマリオッチィ [S. Mariotti 1971]）、真正なテキストへの到達が、より多い写本の存在によって「より困難に」なるということとはできない。というのは、これらの写本のあるものが、他の写本に欠けている適切な読みを保持している、あるいは、他の写本と合致することによって「特異な読み」(*lectiones singulares*)を回避するのを助ける場合があるからである。

たしかに、多くの写本に基づいて作業することは、多大な労苦のゆえだけではなく、また諸異読の中での選択というしばしば厳しい問題のゆえにより「困難」であるが、しかし、正しい読みへの到達という目的にとってはより「容易」でありうる。いくぶん陳腐な例を出すとして、もしプラウトゥスについてパラティーナ版の代表写本しか残されておらず（しかも最良のものではない）、われわれが他のパラティーナ写本も、さらに悪いことには、アンブロジーアーナのバリンプセストも所有していないならば、プラウトゥスの校訂者たちの仕事はあり意味では「容易化される」であろうが、しかし、良い校訂版を作成するのははるかに困難になるだろう。そして結局、少なくともきわめて多くの場合において、「校訂」がテキスト批判に課せられる最も困難な責務であることは真

実である。しかし、「校訂」は唯一の写本の存在によって構成される、困難の第1の段階に比べて、その「第3の段階」というわけではない。比較対照は同質的な事物の間には存在しない。唯一の写本は誤謬に満ちているかもしれず、なおいっそう、推測的批判を必要としているかもしれない。

われわれはおそらく、偉大な文献学者の一節についてのペダンティックな批判に留まりすぎたかもしれない。彼の偉大さは別のところで、すなわち、推測的批判において（あるいは、伝承された読みの理知に溢れた擁護において）に見いだされる。彼はそれを、自らの首尾一貫性を欠いたこの一節が示しているように、常に最高の文献学的作業と見なしていたのである。

第4章 『新約聖書』の校訂者としてのラハマン

われわれはドイツ文学からギリシア語とラテン語のテキストに戻ることにしよう。われわれは、1830年から1845年までの15年間に、ラハマンのテキスト批判の活動の中に、二つの平行する道筋を見分けることができる。一方は、唯一の写本において、あるいは唯一の「最初の刊本」(editio princeps)において伝承された一連のテキストに関わるものであり(ゲネシウス [ボン、1834年]、テンティアヌス・マウルス [ベルリン、1836年]、J・F・L・グーシェンによって着手され、ラハマンによって完成されたガイウス [ボン、1941年]、バブリウス [ベルリン、1845年])、当然なことに、これらには「校合」(recensio)の問題は課せられず、「校訂」(emendatio)だけが課せられた²⁸。他方は、『新約聖書』に関わるものであり、1831年には「試行版」(editio minor)が、そして1842年には「決定版」(editio maior)の第1巻が刊行されている²⁹。

それまでの『新約聖書』の重要な最後の版はグリースバハによるものだった(原著、40ページを参照)。グリースバハの「受容テキスト」(textus receptus)への徹底した盲従は、ラハマンから厳しく批判された(Lachmann 1876: 2.151)。そして彼は最終的に、ベントリーが計画していたことを、すなわち、古代の諸写本と聖ヒエロニムスのウルガータ版にのみに基づいた版を達成したのである。ラハマンもまた、狭量な精神をもった神学者たちの不快な叱責を免れたわけではないが³⁰、時代は変わっていたのであり、「受容テキスト」の権威がもはや甦ることはなかった。

28 バブリウス版のあと、同じ1845年に、ラハマンはベルリンでアウィアヌスの小さな校訂版を刊行した。この場合、写本は多数あったが、しかしラハマンは、単純化を極端にまで押し進めて、それについての指示を一切行わず、テキスト編集資料 (apparatus criticus) においても、「きわめて多数」、「少数」、「二つのきわめて古い版」、「一つのきわめて古い版」というような曖昧な言葉しか用いなかった。この版の唯一の価値は、いくつかの優れた推測に存している。アウィアヌスの真の「校訂」は、フレンナーによるものである (Fröhner in 1862; cf. Fröhner 1862: xii)。

29 Lachman 1831. 序文もテキスト批判資料も見いだされないが、ラハマン自身は自らが従った基準を以下で説明している。Lachmann 1830 = Lachmann 1876: 2.250-72; Lachmann 1842-50.

30 Lachmann 1876; 2.151; Lachmann 1842-50: I.xxx-xxxiii e passim. Hertz 1851: 160, 165-67.

ベントリーという模範の傍らで、ベンゲルの模範もラハマンに影響を与えた³¹。ラハマンが『新約聖書』の伝承において区別した、東方的と西方的という二つのファミリーは、ベンゲルによるアジア的とアフリカ的という二つの「民」(nationes)³²に、実質的には対応している。またとりわけ、ベンゲルから異読の選択の機械的方法をラハマンは引き出した。ラハマンは1830年の「釈明」(“Rechenschaft”)において、次のように述べている。「双方のファミリーに共通する読みはすべて——それが唯一の確証された読みであれ、いくつかの読みが双方に見いだされるのであれ——、それが流布していたこと(verbreitet)を明示しており、テキストの中に引き受ける価値がある。私にとっては、あるファミリーの読みも、別のファミリーの相反する読みも同等の権威をもっている。排除されるべきは、(たとえ、それがおそらく唯一の正しい読みであっても)二つのファミリーの片方の一部によってしか確証されない読みである」³³。この定式化は、われわれが先に引いた(原著35ページ以下)ベンゲルの定式化よりも詳細なものではある。しかしラハマンがベンゲルに負っていることは、もしわれわれが「釈明」のこの一節を、十中八九ラハマンがまだベンゲルの著作を知らなかった時に執筆された、フォン・デア・ハーゲンについての彼の書評(原著51ページおよび111ページ以下を参照)の混乱に満ちた諸規則と比べてみるならば明白である。

ラハマンが「釈明」において区別している3つの場合のうち、第1の場合は1842年の「試行版」の序文において4つに分けられているので、結局、規則の数は7つになる³⁴。そこでもとくに興味深いのは、地理的考慮を導入している第3規則である。すなわち、あるファミリーのいくつかの写本と、別のファミリーのいくつかの写本との合致は、それらが互いにきわめて遠い場所に由来するのであれば、いっそう価値をもつ、というものである。実際に、距離の遠さは、「水平的な伝達」(transmission orizontaler)に対する、混淆(contaminazione)に対する保証である³⁵。すでにベントリーはこのような

31 ラハマンは「試作版」の序文において、「これらの者(すなわち、ベントリーとベンゲル)だけが、私が『校訂』と述べていることが何であるかを理解した」と語っている(Lachmann 1842-50: 1.xxi)。

32 ラハマン以前に、すでにセムラー(Semler 1765の序文)が、二つのファミリーを、「東方のもの」と「西方のもの」として指示していた。セムラーはそれら“recensiones”と呼んでおり、この言葉によって彼は、純粹に系譜的なグループ化というよりも、むしろ「古代の版」、「校訂版」のことを考えていたのだろう。

33 Lachmann 1876: e.257「たとえ、それがおそらく唯一の正しい読みであっても」という留保は、随分と後にアヴェ(Havet 1911, 425-427)によって提示された「正しい読み」(leçon vraie)と「真正な読み」(leçon authentique)の区別に先駆するもののようと思われる。彼自身が述べているように(pp.258, 269)、「試行版」において彼は、総体的には「東方の」ファミリーに、たとえ「西方の」ファミリーがより優れた読みを与えていると自らが認識している箇所においてさえも、従っている。彼は「決定版」においてこの矛盾を訂正したが、しかしそこにおいてさえ、彼は二つのファミリーのオリジナルな読みを再構成しうするためにはあまりに不完全な写本上の素材に基づいていた(それは実際には二つ以上あり、すべてが混淆しているのである)。Cf. Tischendorf-Gebhardt 1897: 2.758-61; Gregory 1900-1909: 2.966-82; Metzger 1968 (1964): chaps.2, 6, 8. (第6章は注意して利用すべきである。)

34 Lachmann 1842-50: 1.viii. 6つの規則のパラフレーズはQuentin 1926, pp.34 s.に見いだされる。

35 Lachmann 1842-50: 1.viii.「さまざまな地域に由来する証言の合致は、同じ地域に属する、たんなる誤りや意図的な改変によって、前者の証言とは異なる写本から生み出される危険性よりもはるかに強力な確証を与える」。ラハマンはその前のページ(p.vi)でより簡潔に表現していた。「とりわけわれわれは、最も古い〔証言〕を、それも、最も広範囲にわたって離れた場所に由来するものを考慮に入れなければならない」。また次のように述べている(p.vii)。「遠く隔たった地域に由来する写本が互いに合致する場合

種類の考察をおこなっていたが、しかし彼は、それを諸異読間の選択ではなく、『新約聖書』の伝承全体の信頼性に関連づけていた。『新約聖書』の多数の写本が、あるものはエジプトから、あるものはアジアからもたらされ、あるものは西洋の教会に見いだされて、いまだに保存されていることは、摂理と神の恩恵である。というのは、それらの場所の距離の遠さと写本の数は、そこには、偽りの合致はなく、ある写本を基にした別の写本の、また任意の写本を基にしたすべての写本の改竄や挿入はないことを証明しているからである」³⁶。そしてわれわれはすでに（原著36ページ註2）、地理的な考察がベンゲルの規範に由来することを見ている。

この地理的基準の重要性についてはパスクアーリが主張し、彼は「新言語学者」によって用いられた周辺部（*aree laterali*）の基準との類似を際立たせた³⁷。その少し前にパスクアーリは、ニュッサのグレゴリオスの写本の伝承を研究していたとき、「周縁」地域に由来する二つの写本に保存されていた真性な読みのケースに出会った³⁸。ラハマンの『新約聖書』への序文における一節を読みながら、彼がこの一致について喜んだこと、またこの序文の中に、あまり機械的ではない、あまりラハマン的ではないラハマンを、ルクレティウスへの註解によって有名なラハマンよりも、むしろパスクアーリ的なラハマンを見いだしたように彼が思ったことはよく理解しうる。

私の思うところでは、『新約聖書』への序文を公平無私な態度で再読すると、この序文が実質的には、ラハマンのテキスト批判の展開全体と軌を一にしているように見える（ただし、前章において示唆したように、写本の伝承のより明確な概念への示唆は、ド

には、きわめて古い源泉からさまざまな場所へと流布したと信じる。他方、個別的な諸例の単独の読みはその場所で生じ、共通の源泉に由来するのではないと見なすべきである」。しかしながら、この最後の章句において、「遠く離れた」写本間の合致に對置されているのは、確証があまり得られていないものとしての、「近い」写本間の合致ではなく、単独の写本の読みである。すなわち、ここでは、もし「例」(*exemplar*)を「準原型」(*subarchetipo*)の意味で理解しないのであれば、「地理的基準」と「単独の読みの除去」とのある種の混淆が存在している。

³⁶ Bentley 1836-38: 3.350 (from Idem, *Remarks upon a Late Discourse of Free-Thinking*). 原著33ページを参照。この章句をラハマンは熟知しており、序文の9ページで類似した仕方で表現している。ラハマンの地理的基準の先駆的記述を聖ヒエロニムス (*Ep. Ad Damasum*, in Migne 1846, 559) に求めようとする試みは説得力があまりない。

³⁷ Pasquali 1952a (1934): xvii-xviii, 7-8, 159-60, 224 n3; cf. Pasquali 1951a: 217 = Pasquali 1968. これと類似した考えについて、ミケーレ・バルビがすでに1891年に表明していた。パスクアーリがこの基準に付与した価値についてはPasquali 1952a (1934): 345を参照。「これこそが、私に本書を執筆するように促した思索の一つである」。パスクアーリ自身はしばしば、M・バルトリの『新言語学入門』(Bartoli 1925: 6-23)を引用している。さらには、バルトリの論考(Bartoli 1943: 76)を参照。新言語学（あるいは、地域言語学、あるいは空間言語学）とは、フーゴ・シュカールトとジュール・ジリエロンの教えに由来する学派で、とりわけ、地理的な分布から言語学的事実の総体的なクロノロジーを再構成しようと企てた。「新言語学者」は「新文法学者」と對置され、ベネデット・クローチェとカール・フォスラーの観念論から影響を受けていた。この影響はジュリオ・バルトーニにおいては明瞭に見てとれるが、マッテオ・バルトリにおいてはさほどでもない。バルトリにおいては、新言語学は、すべての言語の哲学に対する言われなき不信（彼は皮肉っぽく「グロットソフィア」[舌の知恵]と呼んでいた）に對抗するものだった。以上の簡潔な説明は、新言語学派についての知識をもっていないかもしれない、イタリア人以外の読者のためである。

³⁸ Pasquali 1959 (1925): xlv; cf. Pasquali 1952a (1934): 158-62.

イツ語ドイツ文学研究者ラハマンの中に見いださう)。言語学においてもテキスト批判においても、周辺部という基準は、二つの異なる方法において、すなわち一方は「機械的」——この言葉に侮辱的な意味を賦与しない——なものとして、他方は社会＝文化的なものとして理解されうるということを指摘しておかねばならない。最初の場合は、蓋然性の初歩的な計算が問題となる。もし互いに遠く隔たっており、伝達の可能性がきわめて少ない、あるいはほとんどない二つの証言が一致するならば、そしてこの一致を偶然に（すなわち、革新の多元発生に）帰することが難しいならば、証言は真性な伝統を保存していると結論しなければならないだろう。地理的基準がラハマンによって（先に見たように、すでにベントリーとベンゲルによって）理解されていたように、ジャークモ・レオバルディとヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、この地理的基準を理解し、ラハマンが知りえなかった未刊の著作において、ギリシア語に対するラテン語とパスクアリット語のある合致にそれを適用した³⁹。他方、新言語派の定式化とパスクアリの定式化においては、「機械的」側面がすべて顧みられなかったわけではなく、強調点が社会＝文化的事実に置かれた。すなわち、「郡部」は「中心」よりも時代遅れで、より保守的である。パスクアリが述べているように（Paquali 1952a [1934]: 7）、「勝ち誇った革新は、たいていの場合、中心から周辺部へと発散するが、必ずしも周辺部へ到達するわけではない」。ここで「中心」という言葉は、純粹に位置的な意味において理解されているのではなく、また、周辺部において証言された事実の一層の古さの保証は、このような地域間の相互の伝達不可能性によってではなく、そこに住んでいる者の貧弱な活力と文化的威信によって賦与される。そして、〈唯一〉の周縁部において証言された事実でも、新言語学派とパスクアリに従うならば、より古いことがありうるのは真実である⁴⁰。

ともかく、ラハマンが『新約聖書』の編集者としても、厳密にラハマン主義者であったことは、その序言の冒頭自体が示している（Vページ）。そこでは、「校訂」と「改訂」の区別がそれに先立つ諸論考におけるよりも明確になっているだけではなく、また、「校訂」と「解釈」（interpretazione）との相違が、きわめて明瞭に主張されている。すなわち、「われわれは、解釈を介入させずに……校訂することができるし、またしなければならない」。パスクアリが常に批判したのはこの原則である。すでに1830年の『弁明』においてラハマンは、グリースバハに反対して、異読の選択のための内的基準は、「その

39 レオバルディの自筆原稿（Leopardi, *Zibaldone*, pp.2351-54 = Flora 1937: 1417-19. Cf. Timpanaro 1997 [1955]: 162-63）。より手早くはフンボルト（Humboldt 1903-20: 6.1.253）。レオバルディの『雑録』（*Zibaldone*）の章句は1822年のもので、フンボルトの記述は1827-29年のものである。しかし両方とも、ラハマンの死後から随分たって刊行された。

40 Pasquali 1952a (1934): 160 n.1. Bartoli 1925. 「より先立つ層は、通例、より隔絶された地域に保存されている」（p.4）。「二つの言語学的層のうち、一方が周辺部に見いだされ、他方が中心部に見いだされるならば、周辺部の層は通常は、より先立つ層である。というのは、中心部はより隔絶された地域ではないからである（強調は筆者）」（p.7）。われわれが「社会＝文化的」（socio-culturale）と呼んだ要素は、通例は統計的知識に限定しようとする傾向があるバルトリにおけるよりも、地理言語学の他の研究者たち（たとえば、テッラチーニ、ベルトルディ、デヴォート）の著作に現われている。テキスト批評における周縁部の基準については以下を参照。Corti 1961; Santoli 1961: 116 e n.9.

本性上、ほとんどすべてが相互に排除しあう⁴¹と述べていた。そして、この内的基準への彼の嫌悪はまた、ヴェットシュタインへの彼の不当な過小評価を引きおこした⁴²。たしかに、内的基準が相互に排除しあう場合が存在することは疑いえない。ときおり、ある読みが、ある点では「より難しく」(*difficilior*)、別の点では「より易しい」(*facilior*)ことがある。またときおり、「より難しい読み」(*lectio difficilior*)の基準が、とりわけ、スコラ的な厳密さで適用されるならば、「書記の習慣」(*usus scribendi*)と衝突する⁴³。しかし、「解釈なしの校訂」(*recensere sine interpretatione*)は、ラハマン自身の立場から見ても、たんなる自慢でしかなかった。というのは、彼は、諸写本を分類しうするためには、それらの読みを理解せねばならなかったばかりか、また「単独の読みの除外」(*eliminatio lectionum singularium*)をおこなったあとにも、内的基準に基づいて選別せねばならない、記録上の等しい権威をもつ、膨大な量の異読が残るからである⁴⁴。「解釈なしの校訂」を実行しようとする試みは、より最近では、クエンティンの方法であるが、それもすぐにその不毛性が明らかになった⁴⁵。

41 Lachmann 1876: 2.252.

42 ベントリーとベンゲルとは異なり、ヴェットシュタインの名前は、ラハマンによってはほんの僅かしか、しかも好意的にではなく言及されているにすぎない(たとえば「決定版」の序文 Lachmann 1842-50: xxiii.)。

43 このような対照は、類似についての文法的理論(=「書記の習慣」[*usus scribendi*])と異例についての理論(「より難しい読み」[*lectio difficilior*])の間の対照に——機械的な照応でもなく、解消しえない対照ではないにしても——に対応している(この対照は、歴史的には、アレクサンドリアの文献学に結びつくものであり、それについては別の機会に明らかにしたい)。テキスト批判に対する、これら二つの理論に部分的に類似した反響については Kenny 1974: 114 を参照。

44 現在も一般に受け入れられている、ラハマンの分類に従えば、「校合」(*recensio*)はまた、同等の外的な権威がある異読の選択、すなわちパウ・マースが「選択」(*selectio*)と呼ぶものを含んでいる。

45 パスカールは正しくも、こう述べている(Pasquali 1932a: 131)。「すでにラハマンは〈判断〉(*iudicium*)をあまり信用していなかった。クエンティンはこの不信をカトリック的、修道士的に誇張している」。クエンティンの「エクドティカ」(*ecdotica*)は、デー(Dain 1949: 162-64)の「大なる幻影」(*La grande illusion*)と題された章において、情愛に満ちた皮肉ともに廃棄された(皮肉は、ルノワールの有名な映画のタイトルを引いたこの表題にすでに内在している)。デーの第二版の対応する章では(p.177)、クエンティンへの批判はより簡潔で、効力も薄らいでいる。より最近では、クエンティンへの冷静ではあるが、根本的には異論が、バルドゥイーノ(Balduino 1979: 232-34)によって提起された。クエンティンの方法は、テキスト批判の自動化の理論家たちによって再評価されている(Froger 1968; Zarri 1979 および、ザッリのそのほかの著作)。私は、友人ザッリと、私にとっては有益な意見の交換をおこなった。そして、きわめて複雑で、真の毀損よりも異読で豊富な写本の伝統を、ある仕方では処理するために、新しい方法が大きな利点をもたらしうたことを、また実際にもたらしていることを確信した。私はこれまでもまして、自動化に対する、「人間精神」の代替不可能性という修辭的権利に基づいた障壁が誤ったものであり、守旧的なものであると思う。しかし、一つの事実が残されている。すなわち、クエンティンの方法は、誤謬における合致だけが二つの写本の間の親族関係を指示しうるのであり、正しい読みにおける合致は何も証明しない——というのは、それは、無関係な諸写本においても起こりえた、保存の事実なのだから——という異論の前では無力である。クエンティンの方法への愁訴は、自動化の理論家の側にとっては、「哀しい必然」である。というのは、コンピュータは正しい読みと毀損とを区別しえないからである。「人工的言語学者」が必要とされるのだろうが、今のところ、われわれは持ちあわせていない。

[引用文献]

- Ast 1819: Friedrich Ast, *Platonis opera*, vol.1. Leipzig, 1819.
- Avalle 1972: D'Arco Silvia Avalle, *Principi di critica testuale*. Padova, 1972.
- Balduino 1979: Armando Balduino, *Manuale di filologia italiana*. Firenze, 1979.
- Bartoli 1925: Matteo Bartoli, *Introduzione alla neolinguistica*. Genova, 1925.
- Bartoli 1943: Matteo Bartoli, "Una nuova riforma della lex Lachmann," *Studi italiani di filologia classica*, n.s., 20 (1943): 59-77.
- Bédier 1928: Joseph Bédier, "La tradition manuscrite du *Lai de l'Ombre*," *Romania* 54 (1928) : 161-96.
- Belger 1879: Christian Berger, Moriz Haupt als akademischer Lehrer. Berlin, 1879.
- Bentley 1836-38: Richard Bentley, *Works*, 3vols., ed. Alexander Dyce. London 1836-38.
- Contini 1942: Gianfranco Contini, *Un anno di letteratura*. Firenze, 1942.
- Corti 1961: Maria Corti, "Note sui rapporti fra localizzazione dei MSS e 'recensio,' " in *Studi e problemi di critica testuale*, 85-92. Bologna, 1961.
- Dain 1949: Alphonse Dain, *Les manuscrits*. Paris, 1949.
- Dain 1975 (1949): Alphonse Dain, *Les manuscrits*, 3e éd. Paris, 1919 (1e éd. Paris, 1949).
- Ellis 1878 (1867): *Catulli Veronensis liber*, 2nd ed., ed. Robinson Ellis. Oxford, 1878 (1st ed. Oxford, 1867).
- Flora 1937: *Tutte le opere di Giacomo Leopardi*, ed. Francesco Flora: vol.1, *Zibaldone di pensieri*. Milano, 1937.
- Froger 1968: Jacques Froger, *La critique des textes et son automatisation*. Paris, 1968.
- Fröhner 1862: Wilhelm Fröhner, ed., *Aviani fabulae*. Leipzig, 1862.
- Gregory 1900-1909: Caspar René Gregory, *Textkritik des Neuen Testaments*, 3 voll. Leipzig, 1900 (vol.1), 1902 (vol.2), 1909 (vol.3)
- Haupt 1836: Moriz Haupt, *Quaestiones Catullianae*. Leipzig, 1836 (= Haupt 1875-76: 1.1-72).
- Haupt 1875-76: Moriz Haupt, *Opuscula*, 3 voll. Leipzig, 1875-76.
- Havet 1911: Louis Havet, *Manuel de critique verbale*. Paris, 1911.
- Hermann 1827-77: Gottfried Hermann, *Opuscula*, 8voll. Leipzig, 1827-77.
- Hermann 1842: Gottfried Hermann, "De hymnis Dionysii et Mesomedis." (=Hermann 1827-77: 8.343-52).
- Hertz 1851: Maratin Hertz, *Karl Lachmann: Ein Biographie*. Berlin, 1851.
- Humboldt 1903-20: Wilhelm von Humboldt, *Gesammelte Schriften*, 15 voll., hrsg. von Albeit Leitzmann,
- Jahn 1849: Otto Jahn, *G. Hermann*. Leipzig, 1849.
- Kenny 1974: Edward J. Kenny, *The Classical Text: Aspects of Editing in the Age of the Printed Book*. Berkeley, Los Angeles, and London, 1974.
- Lachmann 1816: *Sextus Aurelius Propertius: Carmina*, ed. Karl Lachmann. Leipzig, 1816.
- Lachmann 1817: Karl Lachmann, Recension von Friedrich Heinrich von der Hagen, *Der*

- Nibelungen Lied* (Breslau, 1816), und von Geore Friedrich Benecke, *Der Edel Stein von Bonerius* (Berlin, 1816), *Jenaische Allgemeine Literatur Zeitung* 203-4, no.4 (1818): 249-63 (= Lachmann 1876: 1.81-114).
- Lachmann 1818: Karl Lachmann, “Über G. Hermnn’s Ausgabe von Sophokles’ Ajax,” *Jenaische Allgemeine Literatur Zeitung* 203-4, no.4 (1818): 249-63 (= Lachmann 1876: 2.1-17).
- Lachmann 1826: Karl Lachmann, “Über Vossns Tibull und einige andere Tibull-Übersetzungen,” *Jenaische Allgemeine Literatur Zeitung* 63-67, no.2 (1830): 817-45 (= Lachmann 1876: 2.250-72).
- Lachmann 1829: K. Lachmann, ed., *Albii Tibulli carmina*. Berlin, 1829.
- Lachmann 1831: Karl Lachmann, ed., *Novum Testamentum Graece*. Berlin, 1831.
- Lachmann 1842-50: Karal Lachmann, ed., *Novum Testamentum Graece et Latine*, 2 voll. Berlin, 1842 (vol.1), 1850 (vol.2).
- Lachmann 1876: Karl Lachmann, *Kleinere Schriften*, 2 voll. Berlin, 1876.
- Lachmann 1879 (1833): *Wolfram von Eschenbach*, ed. Karl Lachmann. Berlin, 1879 (1 Aufl. Berlin, 1833).
- Leo 1893: Friedrich Leo, *Rede zur Saecularifeier Karl Lachmanns*. Göttingen, 1892 (= Leo 1960: 2.415-31).
- Leo 1960: Friedrich Leo, *Ausgewälte Schriften*, 2 voll., ed. E. Franenkel. Roma, 1960.
- Lutz-Hensel 1975: Magdalene Lutz-Hensel, *Prinzipien der ersten textkritischen Editionen mittelhochdeutscher Dichtung: Brüder Grimm, Benecke, Lachmann*. Berlin, 1975.
- Metzger 1968 (1964) : Bruce M. Metzger, *The Text of the New Testament : Its Transmission, Corruption, and Restoration*, 2nd ed. Oxford, 1968 (1st ed. Oxford, 1964)
- G. Müller 1958: Gerhard Müller, “Die Problematik des Lucretztextes seit Lachmann, I,” *Philologus* 102 (1958): 247-83.
- Pasquali 1932a: Giorgio Pasquali, Rezension von P. Collomp, *La critique des textes* (Paris, 1931), *Gnomon* 8 (1932): 128-34.
- Pasquali 1942: Giorgio Pasquali, *Terze pagine stravaganti*. Firenze, 1942.
- Pasquali 1947: Giorgio Pasquali, “Preghiera,” *Studi italiani di filologia classica* 22 (1947): 261.
- Pasquali 1951a: Giorgio Pasquali, *Stravanagnze quarte e supreme*. Venezia, 1951.
- Pasquali 1951b: Giorgio Pasquali, Rezension von A. Dain, *Le manuscrits* (Paris, 1949), *Gnomon* 23 (1951): 233-43.
- Pasquali 1952a (1934): Giorgio Pasquali, *Storia della tradizione e critica del testo*. Firenze, 1952 (1a ed. Firenze, 1934).
- Pasquali 1952b (1933): Giorgio Pasquali, *Vecchie e nuove pagine stravaganti di un filologo*. Firenze, 1952.
- Pasquali 1959 (1925): Giorgio Pasquali, *Gregorii Nysseini epistulae*. Leiden, 1959 (1 Aufl. Berlin, 1925).
- Pasquali 1964 (1920): Giorgio Pasquali, *Filologia e storia*. Firenze, 1964 (1a ed. Berlin, 1920).
- Pasquali 1968: Giorgio Pasquali, *Rapsodia sul classico: Contributi all’Enciclopedia italiana di*

- Giorgio Pasquali*, a cura di F. Bornmann, G. Pascucci e S. Timpanaro. Roma, 1968.
- Quentin 1926: Henri Quentin, *Essais de critique textuelle*. Paris, 1926.
- Santoli 1961: Vittorio Santoli, “La critica dei testi popolari,” in *Studi e problemi di critica testuale*, 111-18. Bologna, 1961.
- Sauppe 1841: Hermann Sauppe, *Epistola critica ad Godofredum Hermannum*. Leipzig, 1841 (= Sauppe 1896: 80-177).
- Sparnaay 1948: Heinrich Sparnaay, *Karl Lachmann als Germanist*. Bern, 1948.
- Stackmann 1964: Karl Stackmann, “Mittelalterliche Texte als Aufgabe,” in *Festschrift für Jost Trier*, hrsg. von William Foerste und Karl Heinz Borck, 240-67. Graz und Köln, 1964.
- Timpanaro 1997 (1955): Sebastiano Timpanaro, *La filologia di G. Leopardi*, 3a ed. con addenda. Bari, 1997 (1a ed., 1955)
- Tischendorf-Gebhardt 1897: L. F. Constantin F. Tischendorf und Oscar von Gebhardt, “Bibeltext des NT,” in *Realencyclopädie für protestantische Theologie und Kirche*, hrsg. von Albert Hauck, 2.713-73. Leipzig, 1897.
- Willamowiz 1894: Ulrich von Willamowitz-Moellendorff, “Gedächtnisrede auf Hermann Sauppe,” *Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, 1 (1894): 36-48.
- Wilamowitz 1982 (1921): Ulich von Wilamowitz-Moellendorff, *History of Classical Scholarship*, Trans. from German by Alain Harris, ed. with an Introduction and Notes by Hugh Lloyd-Jones. London, 1982 (= *Geschichte der Philologie*, Leipzig und Berlin, 1921; 2 Aufl., 1927).
- F. W. Wolf 1869: Friedrich August Wolf, *Kleine Schriften*, 2 vols. Halle, 1869.
- F. A. Wolf 1985 (1795): F. A. Wolf, *Prolegomena to Homer*, 1795, trans. with an Introduction and Notes by Anthony Grafton, Glenn W. Most, and James E. G. Zetzel. Princeton, 1985 (= *Prolegomena ad Homerum*, Halle, 1795).
- Zarri 1979: Gian Piero Zarri, “Une méthode de dérivation quentinienne pour la constitution semi-automatique de généalogies de manuscrits: Premier bilan,” in *La pratique des ordinateurs dans la critique des textes*, Colloque international du CNRS (Paris, 29-31 mars 1978), 121-42. Paris, 1979.